

家庭科

テーマ 「まず、やってみる」から「できる・分かる」へ

1 家庭科学習が目指すもの

日常生活を見つめ直し、家庭生活への関心を高め、実践・解決を試みながら生活の自立の基礎を身につけ、より良い自分の生き方・自分らしさを学んでいく子供

(1) 家庭生活への関心を高め家族への思いを育む

子ども自らが、家庭生活を自分のものとして見つめる事が少なくなっている。それは、今日の子ども自身が、情報の多さにもかかわらず、自分の家庭生活を見つめる機会が減ってきているからである。塾へ行かせたり、勉強させる事に力を入れる家庭でも、家の仕事を分担し、家族の一員として仕事をさせる事は少なくなっている。かつては、子どもが家の仕事をする中で、仕事の手順を覚えたり、仕方を工夫したり、やり遂げた充実感を味わったものである。しかし、今は、家事が電化され省力化された事で、逆に、家族のつながりを弱体化させていると考えられる。

そこで、自分の家庭生活はどうなのかと調べたり、自分の家族のためにこんな事をしたいという願いを持って家事の計画を立てたり、あるいは何かを作ってみたりということを家庭科学習の中に取り入れていきたい。自分の家庭生活を身近に感じ意識化する事で、家族との関わりを大切なものと受け留める思いをもつであろう。そして、そのなかでより豊かに生活しようという意識や態度が育つものであると考える。

(2) 生活の自立の基礎を身につけるとともに生活の質を高める

子どもにとって働く母親が増え、自分の簡単な身の回りの家事を自分でやっていく事がますます増えている。しかし、親自身が時間に追われ、子どもに教える事やさせることなく、食事一つ取ってもコンビニや外食産業などで簡単に済ませてしまう事が出来る。他の家事についても最小限に押さえ工夫がされにくいことも多くなっている。そんな中でこそ、学習の中に、身の回りの整理整頓や掃除・身支度などを取り入れたり、手作りのもの(作製・調理)を家族や自分のために作る事や家族の事を考える学習として意識させたい。このような自立の基礎となる学習や家族との関わりをもつ学習を進める事で、家族の一員としての自覚と将来の家族像の基礎が出来るようになる。そして、少子高齢化が進む中、社会生活においても女性の労働力が必要とされる。その一方で、家庭生活においても親の介護など、今まで以上に男女が互いに尊重し合い、協力していく事がより一層求められる。身の回りのことが自分でできることや他人に対して何かが出来事は、男女問わず必要不可欠な事である。男女共同参画社会において、より生活の向上を目指し豊かに生活を送るための自立の基礎をじっくりと身につけるように取り組みたい。それは、学校の学習のみでは決して補いきれず、その

子自身の家庭生活での実践を通して実現していくものと思う。

価値観が多様化し、いろいろな情報があふれる中で、自分にとって何が大切なものか見極め、自分の生活の質を高め、より豊かな生活を求めるように育って欲しい。

(3) 自分の生き方・自分らしさを学ぶ

子どもにとっての自分の家庭は、世界で1つのものであり、他の家庭と比較できないものである。学習する中で、自分の家庭の良さや他の家庭との違いが見えてくる。その中で、今ある状態に疑問を抱いたり、自分の置かれている立場に問い掛けたりしながら、自分自身のものの見方・考え方を発展させていく。そして、自分の日常生活の中にその子らしい工夫が見え、自分の家庭生活に何らかの働きかけが出て、実践・行動にまで高まっていく。これが、生活を見直し、生活の質を問う子供の姿であり、自分らしくより良い生き方を模索し続ける姿である。また、自分の家庭を認識する事で、家族への思いが深まり、その良さを知る事で家族の生き方に学び、自分の家らしさや自分のよさをに気づく中で、自分の考え方・生き方へと高まっていく。

II 取り組みのポイント

(1) 「まず、やってみる」から

家庭科で学習することの多くは家の中で目に付く仕事や事柄ではあるが、子どもたちにとって5学年で初めて自分で経験するということもあり、裁縫箱を手にする事や料理作りなど男女ともに興味津々である。

そこで、まず、やってみる。やってみると面白いと興味をもつ。もっとやりたくなって自分で進んでやる。そして、やる事に慣れたり、やることでうまくできるということが起こる。実際にやっている中でコツが分かったり、なぜそうすればいいかが分かったりする。

この「まず、やってみる。」ということに重点をおいて今年は実践したいと考えた。そうする事で生活に返っていく取り組みができると考えたからである。

事例 玉止め・玉結び、なみ縫いを練習し、「小物作り」に入った。初めての裁縫という事で子どもたちは授業だけでなく休憩中やちょっとした他教科が終わって時間があつた時等にもすぐに小物作りを始め、数個の作品を仕上げたり、それぞれが作品を見せ合つては自慢気で満足そうであった。

このように、「まず、やってみる。」からはいることで、やりながらなぜそうするとよいのだろうと考えたり、どんな縫い方をしたらうまくできるだろうと考え思考錯誤しながら進めていく様子が見えた。そして、いろいろな縫い方を工夫したり、教師や家の人になぞね実践していった。

(2) 実践を計画する

学校で学習した事を生活に生かすために、学習の中で実践の計画を立てて、土日などを使って実践するように考えた。これは、高学年ともなると家へ帰ってからの子どもが時間に追われたり、子どもに時間があっても家の人に時間的余裕がないために、家事の省力化が行われ、なかなか家の仕事を子どもにさせなかったり、年齢に応じた仕事を与えられていなかったりと、それぞれの家の事情があるからである。反対に、父母が共稼ぎのために、家の仕事を家族みんなで分担し、子どももかなりの家での仕事の部分を担っている子どもも昨年度6年生にいたが、まれである。子どもたちが学習したことを自分で実践する場を計画し実行に移して行く中で、知識や技術が身についていくものであらうと考える。

事例 5月の母の日までに、食の基本である「味噌汁とご飯」を扱った。そして、母の日に料理をした子どもが1/3位学級の中にいた。母の日に子どもたちがどんな事を家でするかを計画させ実践した中で分かった事である。今までと一味違う母の日にしたいという子どもの姿がそこにあった。

事例 赤・緑・黄の3つの食品群を習い朝食の見直しで不足しているものを何で補うかを考えた学習後、家の朝食の献立を自分で考え実践することで3つの食品群をバランスよく献立に入れる事や野菜を多く取る工夫が見えた。

学習した事を家でもやるように実践計画することで、実際に子どもの身につき、家の人も子どもがこんなこともできるようになったんだと実感してくれるようになることが、家の人からのコメントを書く欄を計画実践のプリントに入れる事で見えた。その時に、包丁で野菜を切る時に野菜を持つときの手の置き方を家で母親から教えてもらうなど、こまかい事のコツやそのわけを自分で知ろうとした様子なども分かった。

(3) 家族とともに生きる思いを育む

子どもの普段の様子から、まだまだ家では自分の事だけで精一杯で、家の仕事を任せられると言う事には程遠いと考える。そこで、家での実践の計画とともに、実際にめんどどうでもやってみる。そして、家族といっしょにやったり、家族のために自分ができる事を認めてもらいながら自分のできる事を増やし、自信をつける。そうすることで、保護される状態から自立に向かって自分も家族の一員としての自覚が生まれ、家族とともに生きる実感がわいてくると考える。そのためには、家族の人の一言は大きな励みであり、その場での言葉かけだけでなく、計画と実践のプリント等に家族の言葉欄をもうけ子どもの目に触れ届くようにした。色々な形で、家族が互いに気持ちを伝え合う事の大切さを知って欲しいと考える。